

高橋義孝

生々流転

高橋義孝

生々流転

高橋義孝（たかはし よしたか）

1913(大正2)年、東京に生まれる。東京大学卒。文学博士。元九州大学、名古屋大学教授。現在、桐朋学園大学教授、東京都教育委員、NHK 解説委員、横綱審議委員会委員。

主な著書に『高橋義孝文芸理論著作集』（上下二巻）、『粋と野暮のあいだ』など多数。

生々流転

1981年5月25日 初版

1981年6月25日 初版第2刷

著者——高橋義孝

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

郵便番号102 電話 (03) 230-0311

振替 東京1-131334

印刷——祥文堂印刷所

製本——小高製本工業

©Yoshitaka Takahashi, 1981

0095-200083-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします

生々流転

目次

生々流転

回想の情景	11
繫がざる舟	14
酔生夢死	17
東京嫌い	21
縄文土器	24
老いの寢覚め	27
無用の用	30
椰子の酒杯	33
はてさて面倒な	36
首振り牝狸	39
この世では起らぬこと	42
一年の好景	45
一冊の年表	48
悲しきラ・マンチャの騎士	51

マンションと「兎小屋」	54
ドイツ大使主催晩餐会	57
スウェーターのボタン	60
初場所を迎えて	63
春にそむいて	66
夏の裏切り	69
碑文揮毫のてんまつ	72
九月場所がくる	75
一つの推測	78
おトイレ時代	81
日本芸術のアキレス腱	84
しらはえや	88
「無念一敗」と「煮いたん」	92
神州こんにゃくの民	95
一人よがりとうっかり	98
安堵の胸	101

ものも見ようで	104
『赤旗』特派員の抗議	
米軍極秘資料の報告	110
僻地の小学校	113
大学とは何ぞや	116
下手の考え	119
思案投げ首	122
習い事について	125
ある講演の舞台裏	128
大平さんの急逝	131
役人の強弁	134
ポケット手帳	137
ある酒徒の告白	140
有りていを申さば	143
ネクタイと帯締め	146
洋傘と蛇の目	149
	107

古い型のYシャツ 152

いつまたどこで 155

ドイツの古チヨッキ 159

おもちゃ箱

立食パーティー 165

秋口の酒 169

月に嘯く冬の酒 172

相撲取 175

さて読書の効用は、と問われたら 179

「めでたい」とは何か 182

聡明ということ 185

きょうはア 187

味の哲学 191

思い出の博多 あの人この人 196

これはわたしの…… 200

御祝儀転じて香奠となる

203

描写対象と描写様態

206

柱時計と紐の靴

209

額縁の有無

212

ゲーテの別荘

215

技芸と民主主義

218

『生々流転』縁起

221

装幀
道吉
剛

生
々
流
転

生々流転

回想の一情景

もう十六、七年も昔のことである。フランス領内だったか、ドイツ領内だったか、それは忘れたが、九月のとある日の夕方、私は娘とローカル鉄道の、ある駅前のベンチで、この駅で折り返す列車の到着を待っていた。当時私は五十歳ぐらい、娘は二十はたぐらいだったかと思う。

この娘というのは私の次女で、折しもミュンヘン音楽大学に在学してピアノの勉強をしていた。私もある用事でドイツへ行くことになり、ドイツ各地をひとわたりめぐり歩いてから、ミュンヘンに娘を尋ねたのである。そして娘と一緒にフライブルク・イム・ブライスガウへ小旅行を試みた。このフライブルク滞在中、秋晴れの一日、フランス領内の小都コルマルへ出かけた。目的はむろんコルマルの一聖堂にあるマティアス・グリューネワルトのイーゼンハイマー祭壇の、あのすさまじい絵を見ることにあった。

大昔コルマルへ行った時は、この絵はアントニーター僧院の中にあつて、宗教的な枠内のものでして取扱われていたのに、こんど行ってみると、コルマルの美術館へ移されていて、絵の前は黒山の人ばかりであつた。むろんみな観光客である。そういえば小さな静かな大学町のフ

ライブルクも観光客でごった返していた。昭和十二年に最初私がこの町を訪れた時とは打って変わった有様であった。昔は狭い街路の両側には、シュワルツワルトの森の奥から湧き出る清水がちょろちょろと流れていたが、もうそんなものはなくなっていた。

バスでコルマルへ行き、帰りはこの鉄道の駅までバスで戻って汽車に乗り継いだのであろうが、遠い昔のこととて、はっきりとしたことは憶えていない。汽車といっても、十分ばかりすると終点のフライブルクの駅に着いてしまうのである。

ところが今でもはっきりと憶えているのは、駅前のベンチに娘と一緒にかけて、汽車が到着するのを待った三十分ほどの間の情景である。空はもう薄水色に暮れかかって、その夕空の下、われわれの頭上には、多分楓であろうか、数株の大きな木が広々と枝葉を茂らせていた。あたりは物音一つしない。

私はどういふものかこの時のことを、まるで昨日のことのようにはっきりと憶えている。忘れられずにいるというからには、普通ならそこに何らかの理由、因縁があつてしかるべきであろう。ところがどこをどう探そうとも、そういうものは全く見当たらないのである。九月のある日の夕刻、ドイツの国境近くの小駅で娘と一緒に折り返し列車がくるのを待っていたというだけのことなのである。けれども私はなぜその時の情景を、後年何度もなんとも思い出すの

であろうか。さあ、そのわけが解らない。

ただこういうことは言えそうである、あの光景はのちのちそれを思い浮かべるたびごとに、私の中の心に何か充ち足りた、清らかな感情を呼び起すように思われるのである。そしてそこにはごく微量の悲哀感もまじっている。私は思う、ひょっとするとあの頃が、あの時が心身両面に互って私の人生の最も充実した時期ではなかったのだろうか。あの一情景はその時期の象徴のようなものだったのではあるまいか。これはむしろ漠然たる推測にすぎない。しかし何となくそんな気もするのである。

人間は誰しも、そういう意味での一情景の追憶を心の中に懐いているのではなからうか。それを思い出すと、何となく仕合わせな、しかしちょっと淋しい気持ちになるような追憶を。人間は言うまでもなく沢山の記憶、追憶を抱え込んでいる。私がかここに書いた追憶は、そういう種々雑多な追憶の中で、いわば最も純粹な追憶、追憶のための追憶であるような気がする。何しろそれは記憶されるだけの因縁を全く持ち合わせていないのであるから。私は今もまた、椅子によって秋の風に吹かれながら、あの田舎の小駅の夕まぐれの一光景を、何となく淋しい気持ちで思い出す。

繫がざる舟

一日の相撲がはねると、私は蔵前国技館の裏門から外へ出る。この裏門の前から北に向かつて隅田川に平行して広い通りが厩橋のたもとまで通じている。この通りの両側には倉庫とか会社とかいうような建物が並んでいて、いつも人通りが少ない。

私は一人でとぼとぼこの道を厩橋まで歩いて、厩橋の通りに突き当たったところを左へ行く。すぐに厩橋の交叉点である。その交叉点の少し手前の左側に一軒の中華料理店がある。下町のどこにでもあろうという平凡な店である。しかし割合に大きな店で、夕方はいつも近所の客、家族連れで賑わう。料理は可もなく不可もなしといったところで、どの品も量がたっぷりとしている。

私は年来一日の相撲がはねると、必ずと言っていいほどこの店に立ち寄る。一つには疲れを休めるためであるが、また一つには相撲がはねたあとの混雑をここでやり過ごして、たやすくタクシーを拾おうがためでもある。

この店へ立ち寄るようになってからもう何年経つてであろうか。恐らく十五、六年は経ってい